



金丸弘美の

田舎力 地域力創造

VOL. 056

暮らしやすい環境を整え、
村まるごとコンパクトシティを創った、
元気な長野県・川上村



農家で栽培するレタス畑が一面に広がる



村役場に設置された
ケーブルテレビのスタジオ

	高値	中値	安値
東京	1,800	1,700	1,450
名古屋	1,850	1,700	1,600
大阪	2,100	1,850	1,650
福岡	2,400	2,200	1,950
長野	1,750	1,650	1,450

川上村のケーブルテレビの
レタスの市況データ

長野県川上村を訪ねた。東京からだど新宿から小淵沢を経由して信濃川上駅下車。およそ3時間で着く。山梨、埼玉、群馬の3県に隣接する山間地の村で、標高110m、人口4299人、1250戸（2013年）の村だ。森林率89%。村の産業の中心は農業だ。

山間地の農業で、白菜、ブロッコリー、ニンニク、イチゴなど40種類の野菜栽培をしている。一番有名なのがレタス栽培である。570戸ある農家の総売り上げは2000万円から3000万円、1戸当たりの耕地面積が2・72ha。農業が盛んで事業として大きく育ったことから、耕作放棄地も空き家も全くない。す

べて使われているというから驚きだ。後継者の平均年齢は29歳。お嫁さんの6割が東京をはじめ県外からの女性で、しかも高学歴の女性が多い。

レタスの出荷量が全国で断トツ

レタスの出荷量は6万2604トで、市場の7割近くを占める優良産地である。この村は、アメリカの大学とレタス栽培の品種改良の研究連携もしており、海外から来る人たちの通訳は、農家の奥さんたちがしているという。アメリカのワトソン市と姉妹提携もしており、子どもたちの交換留学も盛んだ。また、村が女性に対して海外研修の支援事業を行な

っており、農家の奥さんたちは、ヨーロッパを中心に毎年、農業・農村の視察も行なうなど、山村ながら国際交流も積極的に進んでいる。

地域内での就業率は93・7%、自宅就業率は72・8%、女性就業率63・1%となっている。また高齢者率は25・8%だが、高齢者の就業率は、47・6%という。農業の形態は家族経営なので、主婦も高齢者も働く場があることが大きい。こんな話を聞いたのは、建築家の仙田満さんが主催をする「まちづくりNEXT」の勉強会で、ゲストに迎えられた藤原忠彦村長からだった。

実は、川上村には、ずいぶん前に、レタス栽培の農家を訪ねたことがある。ところが、藤原村長の話をあらためてうかがうと、農業で安定した産業を生み出すと同時に、医療や保健、図書館など、文化面の充実を図ることで、暮らしやすい環境までつくっているということだった。そのことが、若い人を定着させ、かつ、県外からお嫁さんがやってくるという村を生み出したのだろう。

川上村での野菜栽培は、昭和初期に白菜の適地ということが分かり、出荷用の栽培が始まったという。その後、1950年の朝鮮戦争のときに朝鮮半島に出兵

するアメリカ軍の食料として野菜供給が始まり、それまでなじみのなかったレタス栽培が生まれたのだという。その後、国内でもレタスが食べられるようになり、大きな産地となった。

村営ケーブルテレビの開局で生産調整

この産地形成で、大きな力を発揮したのが、88年に開局した村営のケーブルテレビだ。その後、各家庭にケーブルが敷かれた。

かつて、東京市場の野菜価格を知るためには1日遅れで届く『農業新聞』しかなかった。またテレビの電波が弱く県内の放送でも見ることができないということがあったという。

村役場の奥に小さなスタジオがあり、スタッフは3人で役場職員だ。農産物の市況を全農から提供してもらい、それを長野の会社でグラフ化して、その日のうちに、全国の市況を各家庭に無料提供できるようにした。これで、村でまとまって生産の調整ができるようになった。

さらに、村内8カ所に気象ロボットを設置し、そのデータを東京にある専門会社に送り、マップに落としもらい、ケーブルテレビで毎日流している。このこ

とによって村内の地区ごとの気象状況が一目で分かるようになった。

月、火、金は、村内の祭や集い学校行事など、村の動きを15分番組にまとめ、朝昼晩に放映している。村内の人から取材に来てほしいと要望が多く、それに応じて取材に出かけるという。こうしたことができるのは、役場職員が村内の理解が深いということでもある。火、木は特別番組で、運動会をまるごと放送したり、野菜の東京でのPR事業なども放映している。

ケーブルテレビは、村の野菜栽培と直結した市場情報と天候を提供すると同時に、村内のコミュニケーションツールとしても、大きな役割を担っている。

農業の生産が上がり、市場で高い評価を受けて、売り上げも上がると同時に、安定した所得もあることから、お嫁さんが県外からやってくるということにもつながった。高速もできて、車も発達したことから、東京まで2時間で行ける。かつて、陸の孤島と呼ばれた地域は、自然豊かで、農業で生活ができるという環境に変わった。

文化、医療、福祉の充実を図る

一方で、県外から嫁いできた人たちに



とっては、都会のような文化面が物足りない。そこで、図書館やレストラン、体育館など文化面での充実が図られるようになった。さらに、暮らしやすい環境をということから、医療の充実も行なわれている。

図書館に行ってみると、大きな文化ホールと体育館とつながっている。図書館は24時間貸出となっている。個人カードを発行し、専用の入り口から入り、本やDVDを自由に借りることができる。図書館には5万冊が置いてある。

文化ホールは、500席あり、ホールの運営委員会と職員そして実行委員会で内容を決める。夏休みはアニメなど子ども向け映画を週4回上映している。また音楽関係者、コーラスグループも多いことから、コンサートも盛んだと言う。

園児から高齢者まで、 医療・福祉を徹底

村内では、学童や高齢者などが移動しやすいように、村営のバスを運行している。かつて村にもバス会社があったが、利用率が下がり廃止されることとなった。そこで、高齢者の送迎やスクールバスなどを一本化し、一般客も乗車可能となる体制に組み替えた。この運行を国に

要請したが、国の方ではそれぞれの管轄が違っているため、申請許可を得るのにもつとも苦労したという。こうして1982年にバスが運行を開始した。今では1日10本ほどが走り、子どもも老人も村外の来客にも欠かせない足となっている。

さらに98年には、診療所、保健福祉課、デイサービス、鍼灸、レストランなどを一体化させたヘルシーパークができた。一方で、園児から高齢者まで、保健予防、地域医療、福祉を徹底させて、健康な暮

らしの実現を図っている。全国平均の1人当たりの医療費負担は47万円。しかし、川上村は17万円に抑えられている。介護保険を使っていない65歳以上は85・1割にものぼると言う。

川上村に行つて思ったことは、村外のニーズを把握して事業を考えること、暮らしやすい環境を整えること。つまり村まるごとのコンパクトシティの創造こそが、地方を元気にする秘訣（ひけつ）ではないかと思った。

『美味しい田舎のつくりかた』【単行本】

地域の味が人をつなぎ、小さな経済を耕す

金丸弘美 著

出版社 学芸出版社
定価 1944円（税込み）



そこにしかない地域の価値を形にし、小さな規模で直接お客さんに届ける。生産と消費をつなぎ、地方の仕事を生み、自らの営みで地域を巻き込む、ローカル・スモールビジネス。瀬戸内ジャムズガーデン、コスモファーム、まちのシューレ963、良品工房、知憩軒ほか、田舎の豊かさを仕事にする起業家たちの挑戦を多数紹介している。地域の元気、地方の豊かさ、食と料理、女性の活躍など田舎の魅力と興味深い内容が満載です。登場する半分以上が女性起業です。